

現代日本のフェミニズムにおける包摂と排除

横山万葉

本論文は、「現代日本のフェミニズムにおける包摂と排除」と題して現代にフェミニズムがあることの意義を問わんとするものである。フェミニズムの危機が叫ばれて久しいが、一方で「#me too」（わたしも性被害者だ）などのハッシュタグ・アクティビズムや小説・音楽・映画などのメディア作品を通したフェミニズムは「流行」の兆しを見せているようでもある。こうしたギャップはどうして生まれるのだろうか。そもそも、それらで語られる「フェミニズム」は同じものなのであろうか。

危機的状況にあるというフェミニズムの、その要因となるものをそれぞれ保守によるバックラッシュ、女性たちの不支持、セクシュアルマイノリティとの関係、アイデンティティ・ポリティクスの限界と4つに整理し、各々1章ずつを割り当てて検討した。その割り当てと構成は以下のとおりである。

序章 フェミニズムの現在

第1章 ジェンダーフリー・バッシング——フェミニズムへのバックラッシュ〈バックラッシュ〉

第2章 主体化する女性保守〈女性たちの不支持〉

第3章 包摂と排除——分離主義か連帯か〈セクシュアルマイノリティとの関係〉

第4章 差異のフェミニズムに向けて〈アイデンティティ・ポリティクスの限界〉

終章 フェミニズムが示してきたもの

第1章において取り扱うのはフェミニズムへのバックラッシュである。S. ファルーディによると、バックラッシュとは「平等を求める運動がまさにその目的を達成しようとするとき、それを阻むかのようにあらわれる揺り戻し・巻き返し現象のこと」と定義づけられる。ファルーディの米国では1960年代後半からのフェミニズムの盛り上がりに対して1980年代にバックラッシュが起きた。このバックラッシュを推進していたのはニューライト、すなわち保守の面々であった。

日本のバックラッシュも同様に1990年代のフェミニズムの行政化への反動として2000年代に起こった。推進していたのはサンケイ系列を代表とする保守系メディア、自民党系議員、そして新生佛教教会や統一教会などの宗教右派であると目される。

1990年代はジェンダー概念の勃興期であり、これと日本のフェミニズム行政化のタイミングが重なった結果、行政が推進したのは「ジェンダーフリー」という概念であった。特性論の意味を込めて使われていた「男女平等」という言葉に代わり、「ジェンダーフリー」概念を有効打として欲していたのはなによりも教育現場であった。

フェミニスト側、特に草の根のフェミニストは「ジェンダーフリー」への不信感を強めて

いた。行政フェミニズムへの批判とともに、「ジェンダー」概念や男性研究者への不信も強かった。こうした背景があつて、バックラッシャーたちの攻勢にフェミニズム側の反応は薄かった。ジェンダーフリーという用語をめぐるジェンダーフリー論争などにかまけているうち、教育現場とも、男性ジェンダー研究者とも足並みをそろえられず足場をすくわれたのがジェンダーフリー・バッシングだったというのが本章の結論である。このとき、フェミニズムがともに「連帯」できなかったのは教育現場と男性研究者のみならず、ジェンダーフリーの体現者としてやり玉にあげられていたセクシュアルマイノリティの人びととでもある。この失敗は、「誰がフェミニズムを担うのか」という第2波フェミニズム以降投げかけられてきた問いに集約されるのである。

第2章ではフェミニズムを支持しない女性たちを取り扱う。フェミニズムは広く女性全体に資するものであるから、これに反対する女性たちは男性中心主義の社会のなかにあつてその理論を内面化してしまっている〈犠牲者〉なのである（ドウォーキン）と従来はみなされてきた。しかしこれに対し意義をとる研究があらわれてくる。女性を〈運動主体〉としてみなすクラッチ、ブリーらである。また、女性解放運動を女性運動の1つにすぎないとして「妻」「母」としての保守女性の運動も〈フェミニスト〉による女性運動であるとみなすシュライバーとハーディスティがいる。こうした研究は、フェミニズムに反対する女性の中に積極的主体性を見出そうとする研究であるといえる。

また近年若年層の女性を中心に伸長するのはポストフェミニズムである。フェミニズムの役割はすでに終わったとの認識のもとに信じられるポストフェミニズムは、フェミニストが成し遂げてきた男女平等を受容しながらもフェミニズムに反対する。

「ジェンダーフリー・バッシング」が盛んにおこなわれた日本の保守雑誌『正論』『新潮45』に執筆・参加する女性保守を見ることで、このポストフェミニストを含めた今日日本でフェミニズムに反対する女性たちの論理を明らかにすることができた。女性保守は3類型に整理することができる。〈伝統的「女性保守」路線〉〈グローバルな国際人〉〈「右でも左でもない」「普通」の日本人〉である。

〈伝統的「女性保守」路線〉の人びとは、「妻」「母」であることを重視し、家族の保護という観点からフェミニズムやリベラルな政策に断固反対する人びとである。女性が「前」に出ることには何らかの意図があると考えまた実行する彼らは、その態度が自身の言論と矛盾するといえど、モノ言う女性、主体性ある女性像については辛口である。フェミニズムに反対する女性保守としてもっともイメージしやすい姿であるといえるだろう。〈グローバルな国際人〉は、国際経験と高い語学力を活かしてグローバルな視点から政治を語ることで男性に比肩しうる政治力・影響力を手に入れようとする女性たちである。高じて、軍事強硬路線を唱えることもある。興味深いのは、こうしたグローバルな国際人のなかにはその国際感覚のまま比較的リベラルな 이슈に寛容な層もあることだ。自身の努力で現在の地位にまで到達した彼らは、女性が男性と同等に地位を向上させねばならないとの観念はフェミニズムと共有するが、それはあくまで個々人の力によってのみであるという。積極的は正措置などを唱えるフェミニズムは「泣き言」として斥ける、個人主義・新自由主義的傾向をもつ。こうした新しいタイプの女性保守は、伝統的に女性に許されてきた言論の分野を抜け出で、積極的言説を打ち出す点でまさに主体性ある存在であるといえる。

〈「右でも左でもない」「普通」の日本人〉は、特定の支持政党は持たないと宣言し、「右

とか左とかじゃなくて」でも「日本が大好き」であると主張する。日本を愛するがゆえに「反日」な存在には厳しい彼らは、男尊女卑を嫌い、セクハラに怒り、フェミニズムの成果を良いものとして受容している。フェミニズムがなかった時代にまで逆行することを望む〈伝統的「女性保守」路線〉の人びととは一線を画するものの、フェミニズムのことを女を使っている気がして嫌だと拒否感を見せ、不公正に抗うには「自分が強くなるしかないのかな」と述べる。こうした女性たちはネオリベラルな言説に回収され、〈グローバルな国際人〉への支持を強める。ポストフェミニスト的言説の内容によって、二者は似通い接近していくのである。

ネオリベラリズム的価値観をもつポストフェミニストを批判する前に、フェミニズムは自身もまた新自由主義に与してきた事実を自覚せねばならない。「進歩的なネオリベラリズム」と呼ばれるこうしたフェミニズムの態度は、米国においては貧困と反感を生み、その結果こそが反リベラルなトランプ支持につながったという声もあるのである。

第3章は、フェミニズムがジェンダーやセクシュアリティという概念を発見・発展させてきた一方でセクシュアルマイノリティには冷淡であったこと、そしてその態度がいまになって大きな問題を引き起こしているという論考である。

お茶の水女子大学のトランス女性受け入れを機に、2018年夏から日本では大規模なトランスジェンダー排除言説が流行した。そのうちとくに激しく執拗な批判を繰り広げたのはフェミニストであり、トランス排除派のフェミニストと擁護派のフェミニスト、トランスアクティビスト達が入り乱れて、オンライン上での論戦が繰り広げられた。こうしたフェミニストによるトランス排除は世界各国で問題となっており、排除派のことを TERF (trans-exclusionary radical feminist) という。

トランスジェンダー理論／運動は、そのはじめから性別二元論や本質主義的アイデンティティ論への批判を行ってきた、フェミニズムにとって挑戦的なカテゴリであった。

TERF の理論では、生物学的／身体的／遺伝的／経験的に女性でない者は女性ではない。トランス女性は「女性」ではなく「男性」、しかも女性と偽って性犯罪を働こうとする最悪の部類の男性なのである。

イギリスは著名フェミニストのなかにこの TERF が多くおり、これに抗するためフェミニスト達が利用し始めたのが no-platforming という手法である。もともと極右集団やファシストを言論の場から排除するために使われていた手法で、名指しで差別主義者を指名し、その人物を自メディアから締め出す。no-platforming は大手メディアからは検閲や言論の自由の弾圧であると非難されるが、これは特定のエスニシティ集団へのヘイトスピーチ規制とまったく同様の非難である。すなわち、フェミニストが問われているのはただトランス女性の包摂だけではない。TERF のようなフェミニストをフェミニズムは包摂するのか——寛容は非寛容に対して寛容であるべきか。

しかもまた TERF はジェンダーという概念にも疑問を呈する。性差というのは生物学的・遺伝学的なものであって、身体こそが男女の別を分けると主張する。社会的につくられてきた性によってわたしたちは差別されているのだという、第2波フェミニズム以来のフェミニズムに対して「ジェンダークリティカルフェミニスト」とであると挑戦的に名乗る彼らをフェミニズムは包摂／排除できるのか。

日本においては、アカデミアのフェミニストが軒並みトランス女性を擁護する姿勢を見

せたことで、トランス排除派フェミニスト（あるいはジェンダークリティカルフェミニスト）はアカデミズムそのものを疑う姿勢を見せている。米国でのトランプ・ショックと同様に「進歩的ネオリベリズム」なフェミニズムへの不信がこの日本においても垣間見えるのである。

第4章ではアイデンティティ・ポリティクスの限界としてフェミニズムの凋落が捉えられることに言及する。

まず、先行研究の蓄積があるエスニシティ論から、アイデンティティと本質主義との関係を述べる。アイデンティティ・ポリティクスは、ロールズの正義論を掲げる自由主義への批判として「平等」に切り込んだものであった。肌の色、エスニシティ、セクシュアリティ、ジェンダー、階級——こうした差異を考へることなしには真の「平等」はなしえない。「差異の尊重」を重視する多文化主義へと、アイデンティティ・ポリティクスは社会を導こうとした。

しかし、こうした多文化主義は、その差異を絶対の固着したアイデンティティとして認識させ、抑圧の再生産となりかねないことが指摘されるようになる。アイデンティティを堅持せんとする文化本質主義は、往々にして排他的・分離主義的になる。またそもそも固有のエスニシティという観念そのものが社会的に構築されたものであるという研究が紹介される。

本質主義を批判せんとして、その集団の「本質」が実はつくられた流動的なものであったと判明する一連の流れはフェミニズムにも共通して見られた現象である。

男女の特性の差を本質的なものとして認め、女性の素晴らしい特性によってさまざまなことを乗り越えようとした差異派フェミニズムに対し、「女性の素晴らしい特性なんてものではなく、社会的に要請されてきた女性の性格があるだけである」とジェンダー概念を突き付けたフェミニズムは、基本的には本質主義を否定しようとしてきた。

こうした傾向はバトラーの登場によってさらに加速する。ジェンダーだけが社会的に構築されたものではない。生物学的性とされてきたセックスもまたつくられたものであるのだと。

アイデンティティの絶対性を疑うのであれば、アイデンティティ・ポリティクスは機能しないというのが本質主義批判からのアイデンティティ・ポリティクス限界論であった。

アイデンティティは、「自己／他者」、「内／外」を定める時点で根本的に排他的性格を有している。しかしそのアイデンティティはあくまで可変的なものであり、境界線の引き直しは可能である。「女」であることの境界線の引き直し、揺らぎを、いたずらに本質主義批判をするばかりではなく論議によってなすことが今のフェミニズムに求められることである。